

第二節 ペデガシエの画業 『地震と火災によるリスボン荒墟の偉観』

一 書評誌 『文芸年報』と画業 『リスボン荒墟の偉観』

一七五五年の夏『ジュルナル・エトランジエ』の責務をプレヴオーから引き継いだフレロンは、すでにその前年書評を主体とする雑誌『文芸年報』を独自に発刊していた。同誌の基調は絶対王政とキリスト教を擁護するため、ヴォルテールなど〈哲学者たち〉を批判するところにあり、フレロンはとりわけこの事業もために啓蒙思想の宿敵として後世に伝えられる。

リスボン大地震の翌々年、一七五七年の『文芸年報』二月号にはヴォルテールの劇作『メロープ』や『百科全書』の項目〈ジュネーヴ〉への論評とともに、刊行者宛の書簡として、ミグエル・ティベリオ・ペデガシエの画業に関してつぎのような一文が掲載された。

リスボン荒墟の版画

不幸なポルトガル王都の震災のあと、当地に住むふたりの芸術家、パリおよびペデガッシュの両氏が破壊されたまま大建造物の主要な様相について、六点の素描を制作しました。大都会の貴重な荒墟の一端を、版画という職分によって後世に伝えようと尽力されたのです。これを成就するため彼らは素描をパリに送付され、ひとりの理解ある愛好家、趣味と良識を兼ね備えた人物が、そうした希望を欣然と受け入れ、作品を公に供するよう力を添えました。彼の依頼によってこの分野における権威者、王室専属建築家ブロンデルが企画を検閲されたのです。かくして後者は素描の印刻をルバに委託され、いつもながらこの彫刻家が六点の美事な版画の制作に技芸の限りを尽しました。パリでこの作品が販売されるのは、コルドリエ街に近いラ・アルプ街のブロンデル宅、同じくはラ・アルプ街でペルシェ街に面したルバ宅、さらにサン・ジャック街のシュロー未亡人宅。六つの版画に表紙を添え、定価は一部十二リーブルとされています。①

この作品の表紙にはポルトガル語とフランス語で標題と制作者名が併記されている。「画集・一七五五年十一月一日の地震と火災によるリスボン荒墟の壮観 現地においてパリおよびペデガシエの両氏により素描が描かれ、パリにおいて王室首席彫刻家ジャック・フィリップ・ルバのもとで印刻された。」また、そこには王権による出版許可と三カ所の販売元も明記されている。ちなみにこれらの記述から推察すれば、建築家ブロンデル、彫刻家ルバ、販売元シュロー未亡人が居住し、ペデガシエの画集刊行に尽力した地域は、セーヌ左岸のカルチェ・ラタン、繁華なサン・ミッシェル界隈である。『文芸年報』の本拠をサン・ルイ島に構えるフレオンも、支所をサン・ジャック街に置いた。

銅板による六点の絵図は縦四〇センチ、横五六センチの紙型であって、各々にポルトガル語とフランス語で画題が誌され、彫刻家ルバの署名が付せられる。すなわち、第一は「総大司教座の塔と呼ばれるサン・ロケの塔」、第二は「サン・パウロ教会」、第三は「サンタ・マリア大寺院（大聖堂）」、第四は「歌劇場」、第五は「サン・ニコラウ教会」、そして第六は「総大司教座広場」。こうした画題が列記されて、さきの書簡には讃辞が続く。

これらの偉観は精彩ある図像で表現され、建造物の幾何学的な巨大さを巧みな配置が彷彿とさせます。すべて完璧という規範に則るのです。こうした版画が最高の絵画的感銘を与えるのも、ルバの彫刻の技によるところ大であります。貴下がこの画集を熱心にご覧になることを、私はいささかも疑いません。なぜなら、徳高く明敏なすべての魂

はかの怖るべき出来事に無関心ではありえず、パリをはじめ各地の図書館、愛好家の折匏や書齋に被災の絵図が蔵されることに賛同されるでしょう。

敬具。

パリにて、二月二二日。

①

この銅版画集は一七五六年にパリで印刻と発売がなされたあと、翌年ロンドンにおいて再販され、その際に彩色版も公刊された。彩色された版画には英文による見出しが付加される。こうした彩色化にペデガシエ自身がどう関与したかは記録されていない。また、共同制作を担ったパリ氏が、いかなる人物であるかも不明である。これらは十九世紀に至るまで数次版行され、版元によって仕上りに精粗の差が認められる。『リスボン荒墟の偉観』は災害の厳密で系統的な描写としては画期的と評価され、二八年後イタリアのシアンタレッツィ一門が初めてこれを継承し、版画集『カラビア地震』六八点を制作した。②

二、王都中心部の惨状と画集『リスボン荒墟の偉観』

画集『リスボン荒墟の偉観』は震災を描写した代表的な絵図と評価され、個々の版画が多くの歴史書や旅行案内に転載されている。しかし、ここに描かれた建物や地区について、私たちの多くは必ずしも十分な知識を有していない。以下本稿ではこれらの絵図の意義と特質を深く理解するため、リスボンの建造物と大地震の状況に関する若干の史料を繙くこととしたい。

第一の版画に表出されたサン・ロケの塔（総大司教の塔）は、リスボンの市壁の一角に築造され、王都の建設と防衛を伝える重要な古蹟であった。ポルトガルの初代国王アフォンソ・エンリケス（アフォンソ一世）はイスラム勢力を撃退する第二次十字軍に参じ、一一四七年十月二五日難攻不落のリスボンを四百年ぶりに奪還した。この地の城砦サン・ジョルジュを居城と定め、城門の傍らに定期市も開設する。一二五五年コインブラから王都がリスボンへ遷され、外国貿易の発展とあいまって最初の造船所が建造された。③ しかし、イベリア半島中央部からたえず政治的圧迫を加えられ、一二七二年カステリア王国の軍勢が国境を越えてテージョ沿岸へ進撃した。デジャミラ・コウト著『リスボン市史』には、十四世紀における王都の受難と惨状がつぎのように書かれている。

一三七三年二月二三日リスボンはスペイン勢力の手中に陥落した。やがて長期にわたる交渉の結果、国王フェルナンドが敵軍を撤退させるが、占領による被害は甚大であった。市壁が打ち破られ、都心のユダヤ人地区や造船所周辺をはじめ、沿岸部の建物が壊滅した。多くの住居が焼打ちや掠奪を蒙ったのである。市壁の外では災禍が一層大であった。近郊の村落も土壁で囲まれた漁師小屋も破壊され、田畑は掠奪を受け、作物は焼尽した。

コウト著『リスボン市史』（二〇〇〇年） ④

こうした侵略と蛮行を封じるため、国王フェルナンドは城塞都市リスボンの強化を専念し、市壁と市門の増設を指令した。言うまでもなく市壁は外部からの攻撃や侵入を封じるためであり、市門は内部への往来を取り締まる関所である。市壁のあちこちには高い塔が築かれ、遠方の動きも展望台から把握できた。バティスタ・デ・カストロ著『ポルトガル地誌―その歴史と現在』は、この国の風土、歴史、建築、習俗などを詳説した人文地理の

① *L'Année littéraire*, février, 1758. pp.23-24.

② Jan T. Kozak and D. James, *Historical Depiction the Lisbon Earthquake*. On-line : <http://nisee.berkeley.edu/lisbon/>

③ Dejanirah Couto, *Histoire de Lisbonne*, Paris, 2000. pp.61-62.

④ *Ibid.*, p.76.

古典であるが、そこにはフェルナンドによる市壁と塔の建造に関する叙述が見出される。

奪還から二世紀が過ぎたあと、治世を司る国王フェルナンドは、カステリア人の侵略による近年の苦難を考え、リスボンの城塞を強化する必要を感じた。ジョアン・アネスデ・アルマダとヴェドール・ダ・ファゼンダの助言を受け、一三七三年国王は新たな市壁と高い塔を築くよう命令する。また、開発と発展をさらに進めるため、沿海部についてはアルマダ、セジンプラ、パルメラ、セトゥーバル、コイナ、ベナベントの住民およびテージョ河岸の全員を、内陸部についてはシントラ、カスカエス、トアレス・ヴェドラス、マフラ、アランケル、アルダ、アトウギア、ルリンハ、シレイロス、ポヴォス、ヴィラ・フランカ、アルデア・ガレガの住民を賦役に供するよう命令した。

この建設工事は果敢に遂行され、一三七五年に新たな境界と市壁が確立、円周七千パソを新たな境界として、多数の市門も市壁に付設された。

カストロ著 『ポルトガル地誌―その歴史と現在』第三卷（一七六八年） ①

このような市壁と市門はつとにアフォンソ一世によって築造されていたが、フェルナンドの斯業はそれらを一層拡大し、増強させるものであった。『ポルトガル地誌』においては一三七五年に建立された市門また小門三三の地点が列挙され、リスボン西北端についてつぎのように記述される。

第八 コンデスタヴェル門、またはカルモ門。拱門の頂上に聖者像を安置するので、いまはサン・ロケ小門と呼ばれる。サン・ロケ教会の一部としてかつて高い塔もこれに隣接していたが、先年の地震で崩れて、ニザ侯爵邸への通路に倒壊し、ふたりの貴族が死亡した。総大司教枢機卿祝下が例年儀式に臨まれたところである。

第九 イリンダーデの門または小門。イリンダーデ修道院に隣接して築かれ、これを通り抜けると、広いサン・ロケ街へ出る。

カストロ著、前掲 ②

一七六〇年代に上梓されたこの大著は、なお記憶に新しい大地震の被害をも随所で語っている。サン・ロケ教会とそこに隣接する建造物についても、カストロの記述が貴重であり、これによってサン・ロケの塔がなぜ総大司教の塔と呼ばれるかも理解できる。

サン・ロケ。この誓願場はイエズズ会に属し、一五〇六年に創設されたサン・ロケ教会の所有として、一五五五年ジョアン三世陛下の命によりこの地に設立された。一五六七年に改築がなされている。

総大司教枢機卿トマス・アルメイダ祝下の要請によってこの教会で一七一八年十二月末日に神を讃える荘厳で敬虔な儀式が行われ、以後毎年同じ日に盛大な行事を営む慣例となった。そこには国王ご一家とすべての高位高官が参列し、最良の楽師と楽器による合奏のもとで、サント・アンタオ・コレジオの全学生と住民から成る合唱団によって讃美歌が歌われる。こうした行事が大地震以降は途絶えた。そのためアジューダ教会の隣り、新たな宮殿の王室礼拝堂でこの慣例が盛大に営まれ、国王ご一家が参列される。

一七五一年一月十三日サン・ロケ教会に類なきサン・ジョアン・バチスタ礼拝堂が開示され、人々は象眼細工の絶妙な美術品に驚嘆した。この作品は玲瓏たる貴重な宝玉と壮麗な装飾で際立ち、総額二百万の経費を要したとされる

① Joao Bautista de Castro, *Mappa de Portugal antigo, e moderno*, Lisboa, 1768. tomo III, parte V, pp.77-78.

② Bautista de Castro, *op. cit.*, p.79.

が、最高の工芸家によってローマで製作され、慈愛深く敬虔なジョアン五世陛下がそこに置くよう所望されたものである。

地震という災禍に①よって教会正面の一部と塔が破壊されたものの、すべて修復された。

カストロ著、前掲 ①

二〇世紀の前半リスボン大地震の記録を集成したペレイラ・デ・ソウサも、『ポルトガル地誌』の多くを採択する。左記の一文はバテイスタ・デ・カストロの記述と部分的に重複するが、同時代の記録がどのように継承されるかを知る一助ともなる。なお、こソウサの記録集成では画集『リスボン荒墟の偉観』の史料価値も高く評価され、版画「総大司教広場」なども転載された。

サン・ロケ修道院 この修道院はイエズス会に所属し、サン・ロケ教会と同じく、敷地にある古蹟に因む名称を持つ。一五五五年に修道会が結成され、一五六七年修道院として再編された。

セグンド・バテイスタ・カストロによれば、震災よって教会正面の一部と塔が破壊された。同様にモレイラ・デ・メンドンサも言う。サン・ロケの修行場では正門が倒壊し、塔などの建造物が破壊された、と。

十六世紀のブラウニオ地図を見ると、サン・ロケ教会の西側、教会正面に隣接してひとつの塔が描かれている。現在はこの塔が存在せず、地震で倒壊したと推測される。

なお、サン・ロケ修道院に沿ってフェルナンドの市壁が続き、その一角にアルヴァロ・パイスの塔と呼ばれる角塔が築かれていた。ルバ印刻の版画集に示されるとおり。この塔が一七五五年の地震よって甚大な被害を受けたと思われる。

ソウサ著『リスボン大地震一七五五年十一月一日―その人口学的研究』第三卷（一九三二年）②

第二の版面に描かれたサン・パウロ教会については、破壊された外壁とともに、崩れ落ちた石材や瓦礫が印象的である。描かれた人物像が比較的多く、彼らの服装や様子は平常とさして変わらない。

サン・パウロ教区は王宮西の河畔に近く、人口のきわめて稠密な地区にある。大地震、大火、大津波という三重の猛威に曝され、もつとも被害の大きな地域のひとつとされる。モレイラ・デ・メンドンサは著書『世界地震通史―リスボン大地震』で火元のひとつとしてサン・パウロ教会を挙げ、そこから始まる周囲七キロの円形を描いて、延焼の及んだ範囲としている。③ この教会の起源は非常に古く、一四二二年の創建と門前の石碑に刻まれ、一五七二年作成のリスボン市街図にも記載されると言う。さきに述べた『ポルトガル地誌』にはサン・パウロ教会についてこうした由来とともに、十年前の被災の状況も誌される。

サン・パウロ教会も大地震よって破壊され、そこでは六十人以上の信者とふたりの聖職者が死亡した。直後の火災よって神殿とそこに蔵される一切も焼尽した。被災を免れたのは、秘蹟像だけである。この聖像は当日洗足のためジョアン・ネポミュセノ教会に移され、翌日日曜の夜にはサンタ・イザベル教区の教会に、以後はふたたびジョアン・ネポミュセノ教会に置かれた。古い建物の横に木造の教会が造られたのち、一七五七年の聖体祝日の前夜によろやく聖像は戻された。

① *Ibid.*, pp.266-267.

② F. L. Pereira de Sousa, *O Terremoto do 1.º Novembro de 1755 e um Estudo Demografico*. Lisbon, 1932. Volume III, pp. 569-570.

③ J. J. Moreira de Mendonça, *Historia universal Dos Terremotos*, Lisboa, 1757. pp.125-126.

薔薇窓で名高いリスボン最古の名刹、サンタ・マリア大寺院が第三の版画の題材である。ここでは大寺院正面の骨格が残骸として聳え、巨大な支柱の横転が地震の激烈な破壊力を感じさせる。絵図左端に配された建物は、隣接するサン・アントニオ教会の一部であろう。

リスボン攻囲によってイスラム勢力を敗走させたアフォンソ一世は、ときには回教寺院を改修しつつ、カトリック教会と教会教区を数々再興した。ポルトガルの歴史学者コウトは『リスボン市史』において大聖堂建立についてつぎのように語る。

リスボン陥落の一週間後、一一四七年十一月一日万聖節に四人の司教を伴ってアフォンソ・エンリケスは、回教寺院を浄化する儀式を行い、大聖堂を建立する決意を示した。実際に大聖堂が造られたのは、イスラム建築の廃墟ではなく、その近隣であることが、修道院の遺構発掘で判っている。キリスト教徒にとってイスラム教徒に対する四世紀ぶりの決定的勝利の記念として、大聖堂は十二世紀末に完成し、以後城砦と同じく王都に君臨するに至った。そこは世俗的権力の象徴でもあって、その広場には当初リスボン市会も造営されていた。

コウト著『リスボン市史』(二〇〇〇年) ②

こうしてサンタ・マリア大寺院は十二世紀以来リスボン司教座を擁し、総大司教教会の創設まで大聖堂として最高の格付けがなされた。また、大聖堂には由緒あるサン・アントニオ教会が隣接し、その一帯はアルファマ麓の聖域として尊ばれていた。ここでも『ポルトガル地誌』に誌された記録を参照したい。

もつとも古い名刹が怖るべき出来事、大地震から受けた被害も軽度ではない。強烈な衝撃によって穹窿と尖端が堂内中央の身廊へ倒壊し、強靱な円蓋も崩れてやはり身廊へ墜ちた。時計台を配した塔も同時に破壊され、いくつかの釣鐘も割れた。教会の内部では祭壇の高所に置かれた聖母像が首と胴に分断され、後日教会の近隣、ある婦人の敷地において発見された。聖歌隊席に飾られた十字架像、堂内の荘厳なオルガンも同じように打撃を蒙った。

ついで発生した凄まじい火災も深刻な被害をもたらした。光輝ある殉教者、聖ヴィセンツの遺体を納めた宝蔵が無惨に焼尽しただけでなく、それ自体が千切れ、焼かれた残骸となり、後日祭壇で発見された。聖母を祀るいわゆる大祭壇に飛火すると、炎はさらに勢いを増し、崇敬すべき聖像をはじめ、その衣装や壁龕へきがんのすべてを焼き尽した。教会の一部も火災によって甚大な被害を受け、地階の身廊の屋根が著しく破壊された。鐘楼内部の小礼拝堂でも同じ事態となり、すべて焼き尽されて、古来の文書保管室も灰燼に帰した。まもなく高名な建築技師、モノエル・マイヤが調査のため派遣される。聖器室までは破滅が及ばず、大寺院の装具や装飾も焼失を免れた。

カストロ著、前掲 ③

テージョ歌劇場の被災を描いた第四の版画では、内部の様相が壮大に表現される。左右の六階建客席がすべて粉碎され、巨大な障壁のみが屹立する。リスボン遷都五百年を祝すこの劇場は、イタリアの著名な建築家、ジョヴァンニ・カルロ・ビリエナの設計により、地震襲来の半年前、王妃マリアナ・ヴィトリアの誕生日に開場した。

① Bautista de Castro, *op.cit.*, p.395.

② Couto, *op.cit.*, pp.56-57.

③ Bautista de Castro, *op.cit.*, pp.348-349.

① 歌劇場の豪華な構造については、神父マノエル・ポルタルの記録が詳細である。歌劇場の北はほぼ三百メートル、ノヴァ・デ・アルメダ街のオラトリオ会修道院で被災した彼は、同志の聖職者に救出され、その後一年間の出来事を綿密に記録した。

王宮には歌劇場が隣接されていた。どれほど広い奥行か判らないが、横幅も同じく長大で、障壁もきわめて高く、大理石のバルコニーでは鉄製の欄干をつたって片側の空間から他方の空間まで移動できた。そこには水を満たした石造りの水槽が造られ、神からの劫罰に備えて消火栓も装置されていた。もつとも奥には半円形の平土間があり、貴族、聖職者、行政官などの位階別枱席が、舞台とほぼ同じ高さでに並んでいた。二階半円形の最前列には閣僚と国王ご一家の貴賓席が設けられ、三階の高みには各国大使の枱席も用意された。

この歌劇場がきわめて広壮であるため、軍人が乗馬で出仕した。遠近法を駆使して歌劇に相応しい特色ある背景が舞台に組まれる。ここに招かれたイタリアの音楽家は、多数に及ぶだけでなく、ヨーロッパにおいて最良の部類に属した。エゲシエリひとりを招請するだけに、衣食住の経費のほか年俸三万五千クルザードを支給し、付き人への手当としても一万クルザードを与えたのである。

三つの巨大なシャンデリア、優美で精巧な水晶のシャンデリアが天井から吊され、開演の前は平土間も特別席も照らされている。ここでは消火装置が絨毯で隠され、燦然たる照明を楽屋裏に放ち、舞台が進行する。

歌劇場の公演、地上の桃源郷を楽しむ観客について言えば、彼らに付きそう従者が多すぎる。ともあれこれこそヨーロッパにおける最高の歌劇場、ないし最高の歌劇場のひとつである。

開演を待つ広間には到る所に水晶の鏡と美事な木彫りが配され、四隅には大理石の大きな胸像が置かれている。開幕まで国王陛下をお待たせするためか、広間がかくも豪華であるため、舞台の建造に劣らぬ出費と評される。

かつまた、容姿や衣服を整える化粧室では、出演者の衣装を実際には高価でなくても、贅沢なものに装う必要があった。

ヨーロッパにおいてとくに著名な歌劇場、数百万クルザードの費用と言われる歌劇場が、儂くも一気に壊滅したことを伝えるため、以上私は予備的な事実について書いた。まさしく火焰によってすべてが燃焼し、灰塵に帰したのである。これについてとくに信頼できる人物の証言を誌したい。歌劇場が燃え始めたとき、彼女は王宮に留っていた。激烈な火勢はあらゆる装置や油性の物体を焼き尽した、と。また、こうした異変のまさしく前触れであろうが、すでに王宮では大砲の発射に似た轟音が聞えたと言う。地震では倒壊に到らなかったが、火災によって歌劇場は黒焦げの石材の山、崩れ落ちた障壁の谷となった。

ポルタル著『リスボン大地震詳説』（一七五八年） ②

第五の版面に表現されたサン・ニコラス教会はリベイラ王宮とロシオ広場のほぼ中程に位置し、その起源はサン・パウロ教会よりもさらに古い。宗教史によれば、一二八〇年に司教マテウスが新たな寺院の建造を指示し、一四三〇年ジャオ一世はこの教会の収益をリスボン大学に分与するよう命じた。また、この教会は一六五〇年に再建されたと、外壁の石碑に誌されている。パウテスタ・デ・カストロは『地誌ポルトガルの古今』でこの教会の被災をつぎのように誌す。

大地震に襲われた不幸な日、サン・ニコラス教会は無惨にも完全に破壊され、直後の火災にとって貴重な品々もす

① Paice, *op.cit.*, pp.47-48.

② Manoel Portal, *Historia da ruina da cidade de Lisboa*, in Pereira de Sousa, *op.cit.*, pp. 602-603.

べて焼失した。また、痛恨の極みであるが、教区に住むおほぼ四千人がこうした災厄によつて死亡した。教区が壊滅し、荒墟に化し、居住不能となつたのである。主任司祭はグロリア坂のプレザ礼拝堂に居を移し、ロシオ広場の仮設小屋を拠点とするサンタ・ジュスタ教区と被災直後の二カ月間連携を密にした。

カストロ著、前掲 ①

サン・ニコラス教区は王都のもつとも繁華な地域であつて、平行するふたつの大道、プラータ街（銀座通り）ウウ口街（銀座通り）を基軸に多くの細道が複雑に交叉していた。そこには金銀細工師や宝石商が住み、織物業者、皮革商人、呉服屋、小間物屋が軒を連ねたと言われる。② サン・アントニオ教会の北側と同じく、この一帯にもいわば外国人居住地があつた。イギリス人貿易商ローレンス・フォークスも、この教区のムダス小路に商舗を持ち、万聖節の朝ふたりのポルトガル人に應對していた。そのとき轟音とともに大地が激しく揺れ、みな近くの拱門のもとへ避難した。以下は貿易商フォークスが後日実弟に宛てた書簡である。

怖るべき第二の震動は来ました。暴風に翻弄される船の帆柱のように自宅が前後に揺れるのを見て、頭上に倒壊するのではないかとそのとき震えました。神へ慈悲を願ひ、その甲斐はありました。震動が止むや、ルイズさんが瓦礫を踏み分けてサン・ニコラウス教会への道を探しました。やや遠いが、通れる道はある、と彼が報告します。自分のあとに続くよう、ただちに私は家族全員に命じました。こうして全員がサン・ニコラウス教会へ避難しました。しかし、そこでは恐怖に困苦が加わり、さらに遠くへ一緒に逃れようと決意したのです。一方では多数の人々が死に瀕し、他方では聖職者に付き添われた人々が瓦礫の間を駆け回つて、みずから懺悔を行い、息絶えだえな者に赦免を勧めます。まさに衝撃的な光景でした！）神よ、お慈悲を、とだれもが大声で叫びます。私はサン・ニコラウス教会を迂回し、アルコス街を経て、ロシオ広場へ辿り着きました。途上では悲惨な人たちを幾度か救いましたが、怖い場面にますます出会うばかりです。これを喩えるならば、若き頃脳裡に教え込まれた絵図、哀れな罪人が最後の日に「神の慈悲を、」と叫ぶ絵図にほかなりません。

フォークス「一七五五年十一月付弟ジョセフ宛書簡」（一七五五年） ③

第六の版面に描かれた総大司教教会と総大司教広場は、カトリック教国ポルトガルの重要な表徴と考えられる。リスボン総大司教座の由来、総大司教教会の建造については、カストロ著『ポルトガル地誌』に依拠して前節で縷々述べたが、一七三〇年パリで刊行された著者不詳『都市リスボン細叙』をここでは紹介する。

総大司教座は王宮の礼拝堂にある。月並みな建築で壁画も平凡であるが、堂内はきわめて広壮である。内陣の祭壇のほか十二の祭壇があつて、いずれも壮麗に飾られている。宝石を鏤めた二段の特別席が設けられ、普通国王と王妃がその席でミサに臨む。日曜と祭日には通常総大司教が主宰にあたる。祭壇では十八人の聖堂参事会員がみな僧帽を被つて大司教を補佐し、三十名ないし四十名の聖歌隊がこれに加わる。器樂を伴わぬローマ式音楽であるが、聖歌隊のなかには優れた歌い手が多い。

総大司教はドン・トマス・デ・アルメイダというお方で、以前はポルトの司教であられ、宰相の弟君にあたる。国王は彼を相応の邸宅と配備で遇しておられる。儀式の次第を述べよう。まず総大司教座の十字架が騎馬によつて運ばれる。すぐに続いて徒歩の従僕二十人に護られ、総大司教を乗せた豪華な駕籠が現れる。そのあと豪勢で巨大な有蓋

① *Bautista de Castro, op.cit., pp.375-387.*

② *França, op.cit., pp.21-22.*

③ *Lawrence Fowke, A Genuine Letter to Joseph Fowke, his brother dated November 1755. pp.4-5.*

馬車四台が各々六頭の驟馬に牽かれて来るが、その先頭は無人の裝飾馬車であり、他の三台には総大司教に次ぐお歴々が分乗する。

これら僧帽の聖堂参事会員は第一級の貴族より選抜される。司教の地位を授かり、国王から各自五千クロワサード、フランス貨幣にして実質約八万リーブルの年金を受けとる。聖務を彼らはきわめて厳密に遂行し、自己の威厳を完全に発揮するため、通常駕籠に乗り、徒歩の従者六名を従える。

著者不詳 『都市リスボン細叙』(一七三〇年) ①

三 画集『リスボン荒墟の偉観』の意義および特色

画集『リスボン荒墟の偉観』で描写された地点と建物について、それらの由来や役割を把握した私たちは、博識多才なペデガシユが豊かな学殖をこの画業に遺憾なく組み入れたと感じざるをえない。

王都の破滅を表現する素描の第一は、リスボンの創建と防衛を伝える古蹟、サン・ロケの塔であった。画集の最後を締め括るのは、当代の権勢と栄華を集結させた総大司教広場である。被害の甚大な低地帯については、人口稠密なサン・パウロ教会とサン・ニコラウ教会の一角が一方で選ばれ、華美な貴顕が集う歌劇場が他方で選ばれた。高地帯では西側バイロ・アルトに建つサン・ロケの塔に、東側アルファマに聳えるサンタ・マリア大寺院を対比させたとも考えられる。

古今の地震を描いた膨大な図像が、チェコ科学アカデミーの地球科学者ヤン・コザックによって集積され、リスボン大地震についてもカリフォルニア大学バークレー校の工学者チャールズ・ジェイムズの協力のもとに、九八の作品がオンラインで公開されている。② これらの史料は逐一綿密な検討と系統的な評価を必要とするが、ここでは画集『リスボン荒墟の偉観』の意義と特色を明確にするため、数点の絵図に限り考察したい。

ジェイムズとの共同執筆による論文「リスボン大地震の絵図」において、コザックは震災を表現した代表的な図録としてルバによる版画「総大司教広場」と一八世紀末の版画「リスボン大地震の劇的光景」(別掲(リスボン大地震の絵図①))を提示した。これらふたつに共通して描かれたのは、地盤を陥没させ、建造物を倒壊させる凄まじい地震の破壊力である。地震工学における課題のひとつは、施設や建物に対する衝撃を数量的に計測することにあり、これらの作品は震動の規模を検討するのにも役立つと言う。現代の自然科学者コザックとジェイムズによる十八世紀絵図の分析をつぎに開陳する。

これらふたつの版画は異なる地域における相異なった現実を表現する。ルバの版画に描かれたのは、地震で破壊され、おそらく火災の被害も受けた建物である。大部分硬い岩石と思われる丘は、ところにより僅かに地割れしているが、大量の土砂崩れは見当たらず、断層や地滑りもない。広場では丘の麓を歩く人もあり、破壊された前景の障壁や建物も地中に埋もれた様子はない。この絵画と版画の目的は現実的・経験的手法によって、一七五五年万聖節の出来事による建物の被害状況をできるだけ正確に明示し、地震のより深い意味は付加しないところにある。対照的に第二の版画に描かれるのは、強震によってもほとんど無傷であった人たちと石造りの建物が、地中に沈んでいく様相である。このとき地盤がなかば液化しているように見える。ここでは港湾近くの軟弱な土壌が溶解するのを、大胆に描くこともできたであろう。また、付近の断層作用によって惹き起され、住民を呑み込んだ地割れをも表わせたかもしれない。さらには港湾に接する土壌が内陸へ広がったり、丘陵から下降する土壌が、不幸な人々を押し流す様子をも描写できたであろう。しかし、被災者を中央に描く手法からも察せられるとおり、第二の版画の目的は人間の災厄

① Anonyme, *Descriptions de la ville de Lisbonne*, Paris, 1730. pp.16-19.

② On-line : <http://nisee.berkeley.edu/library/earthquake/>

を表現することであった。自然現象を正確に描出するよりも、むしろ庶民の艱苦に焦点が置かれたのである。彼らを描いた画像によって、被災地から遠く離れた人々にも、地震の犠牲者への関心と同情を喚起できたと思われる。

これらふたつの図録は地震についての相異なる見方を示すとともに、イギリスとフランスの啓蒙思想に掲げられる普遍的な課題を表わすように思われる。すなわち、ひとつは自然災害への迷信的・教理的解釈への理性的・科学的・経験的推論の勝利であり、他は万人の福祉を願う心豊かな希求である。

ヤン・コザック「リスポン大地震の絵図」 ①

啓蒙思想の影響と思われる第一の要素、自然災害の経験的・科学的表現として、さまざまな絵図のなかで画集『リスポン荒墟の偉観』が第一である、とコザックは称讃する。啓蒙の政治家ポンバルと同世代のペデガシエは、日蝕の観測も行ったと伝えられ、自然科学の素養、力学や工学の知識さえも備えたと思われる。とくにこの画集では六つの連作によって、建造物に及ぼす地震の物理的作用が様々に描写された。こうした作品の特色を一層明確にするため、コザック「ジエイムズの論文ではさらにひとつ代表的な絵画「リスポン、サンタ・カテリーナ広場」(別掲「リスポン大地震の絵図②」)が分析される。この油絵は一七六〇年ジョアン・クラマによって制作され、高台へ避難した群衆が陸離たる彩色で描かれている。サンタ・カテリーナはリスポンを形成する七つの丘のひとつに数えられ、その高台に由緒ある教会と広場が位置した。サンタ・カテリーナの教会教区は広く、低地帯の河岸地区も一部含まれる。貿易商ブラドックの住居もこの教区に属し、岸辺で第二の震動に襲われた彼は、遠くのサンタ・カテリーナから建物の倒壊と民衆の悲鳴を耳にした。

クラマの油絵には避難する多くの被災者が前景に描かれ、彼らの半数は横臥している。遠景には破壊された教会が、なお炎と煙に覆われている。しかし、この絵図には宗教的な要素も濃厚であって、屹立する十字架、教え諭す聖職者、跪拝する信者の画像によって、神の怒りによる劫罰であったこと、必死の祈祷によって神の慈悲を求めたことが示される。空中を飛ぶ天使の姿は、寛恕を得た未来の幸福を暗示するものである。当時の一般的な心性や想念に合致するのは、このような描出と考えられる。これとは対照的に『リスポン荒墟の偉観』では教理や信仰に基づく表象が完全に排除される。この画集を構成する版画六点のうち、五つまでがカトリックの建造物を対象とするにもかかわらず、明らかに十字架や聖職者と確認できる図像はひとつもないのである。

啓蒙思想のいまひとつの理念、万人の福祉との係わりを考えてみよう。避難する人々の艱苦はクラマの油絵からも読み取れるが、被災者の悲惨や救助を主題とする作品はかなり見出される。コザックに提示された「リスポン大地震の劇的光景」に加えて、筆者は震災後の奉納画「子どもの救出」(別掲「リスポン大地震の絵図③」)とチェコで制作された銅版画「四万人の生き埋め」(別掲「リスポン大地震の絵図④」)とをここで挙げたい。聖母マリアに捧げられた奉納画では生き埋めになったひとりの子どもが数人の男に救出され、なおも作業が続いている。この絵図が子どもの生存と幸福を願う心情から生まれ、万人の福祉への希求に根ざすことは言うまでもない。幼な子を抱くマリアの図像によって、救出できた感謝の気持を表すとともに、来世における犠牲者の至福を祈ったであろう。他方銅版画「四万人の生き埋め」では、大地の激震の襲われた住民の一群、その大半である女性が前面に大寫しされ、被災者の動顛し、痛嘆する表情も克明に描かれた。見出しのチェコ語は、「十分間に四万人が生き埋めとなり、死亡した」と読み取れる。頭上で建物が崩れ、遠景に火災も見られるが、ここでも宗教的要素は払拭され、彼らの惨状が一層絶望的に感じられる。これらの絵図の主題である被災者の惨状が、『リスポン荒墟の偉観』では皆無に近いことは否定できない。しかし、その事由はペデガシエらが民衆の幸不幸に冷淡なためではなく、さきにもコザックも指摘したとおり、作品の目的と主題が異なるためである。

① Charles D. James and Jan T. Kozak, Representation of the 1755 Lisbon earthquake, pp.28

しかし、さらに別の視点からペデガシエらの素描、ルバの版画をを考察してみよう。彼らの絵図では被災者の艱苦が表現されぬだけでなく、地を覆う瓦礫も累々たる遺体も多くは撤去されている。こうした画像は『リスボン荒墟の偉観』の制作が、地震発生から相当の日数を経たのち、行われたことを立証する。また、六つの画面すべてに添えられた人物像を仔細に眺めると、呻吟や悲嘆の様子はなく、物腰や衣服も乱れてはいない。数人ずつ荒墟に立ち止まる人影は、むしろ破壊の状況を確認したり、復興への対策を指示しているとも映ずる。『地誌リスボンの古今』によれば、サンタ・マリア大聖堂では被災後まもなく高名な建築技師マイヤが王権によって現地に派遣された。版画「サン・ニコラウ教会」や「大聖堂」にそのような人たちの絵姿を読み取ることも、あながち不条理ではないであろう。『リスボン荒墟の偉観』の要素として災害の收拾や復興への始動が含まれるとすれば、そこには啓蒙思想に通じる別の特徴が感じられる。なぜなら、自然に対する科学的認識や万人の幸福を願う希求とともに、啓蒙思想には理性に基づく未来の建設という理念が含まれるからである。

多岐にわたるペデガシエの業績を詳しく紹介した研究者ジョン・ポール・ポワリエは、『リスボン荒墟の偉観』が壮大な構図によって十八世紀後半のロマン主義美術に影響を与えたと評価している。ただし、版画第一において遠景に描かれた宮殿が無傷であるのは、奇妙に感じるとポワリエは註記する。① おそらくこの絵図は「リスボン、サンタ・カテリーナ広場」と同じく震災の純然たる写真ではないであろう。総大司教教会の遠景として描かれた建造物は、先頃まで聳えていた宮殿、あるいは早晩再建すべき宮殿かもしれない。クラマの油絵に描かれた天使が被災者の救済と今後の幸福を象徴するように、こうした添景にペデガシエらは幸ある未来への希望を託したとも思われる。『文芸通信』に掲載された推薦文には、この版画集が図書館だけでなく、愛好家の折靴や書齋にも蔵されるように、と書かれていた。『リスボン荒墟の偉観』に復興への始動という一抹の明るさがなければ、そのような勧めはされなかつたであろう。

初稿：二〇一二年二月二三日

改編：二〇一九年 八月二四日

① Jean-Paul Poirier, *Le tremblement de terre de Lisbonne*, Paris, 2005, pp.19-20.